

長岡開府400年

vol.2

ROOTS 400

後
長
越
岡

長岡城

<特集>

長岡廃城の秘話

城はなくとも
夢がある



発刊趣旨

英語の ROOTS (ルーツ) は、樹木の根や物事の始まりを意味します。また、先人や祖先の意味も併せ持ちます。「越後長岡 ROOTS400」は、開府 400 年を迎える長岡の歴史を遡り、まちの ROOTS を探ります。



長岡藩絵師 飯島文常筆「蔵王大祭屋台行列図」(部分)

旧暦の6月15日は、長岡築城以前から蔵王堂城址の二之丸跡に鎮座している蔵王権現社の蔵王大祭の祭日であった。城下の18町内が祭り屋台を出して町内をめぐった。そのハイライトは、18台の屋台が領内の町人や農民とともに、町口門から大手門を抜けて、城内の厩(うまや)前馬場に集結した。この日ばかりは、領民1万人余りが侍の家族とともに城内に入った。12メートル98センチ(実物)に及ぶこの絵巻は、蒼柴神社に所蔵されている。



町内の屋台。これは人が担いで運んだ屋台だが、時代によっては車をつけたもの。幟(のぼり)をたてた屋台も各町内からでた。先頭の囃(はやし)屋台は舟形の神田町などが交互に務めた。



表紙・長岡城本丸御三階櫓(模型・長岡藩主牧野家史料館に展示)

長岡城のシンボルともいべき本丸御三階櫓は、本丸郭(くるわ)の西北の隅にあった。堀の水面から屋根の鯀鉾まで約23メートルの高さがあったといわれ、城下の隅々まで見渡せた。最上階の西側に唐破風の出窓があり、城下の人びとは、御三階と親しみをこめて呼んでいた。

巻頭言

越後長岡は、譜代大名牧野氏七万四千石余の城下町でした。しかし、江戸時代の長岡城は、今はあとかたもなくなっています。かつて三万九千坪(十三ヘクタール)もあった御城内は、近代都市に生まれかわっています。

御三階櫓をはじめとする八つの二階櫓は、松葉、青葉に映えて、白壁の美しさを誇っていましたが、新幹線の長岡駅、市庁舎と市民交流の場アオーレ長岡や学び舎のまちなかキャンパス長岡などになっています。もちろん、鉄筋コンクリートのオフィスビルも混在しています。かつて、長岡藩の中心であった長岡城は

近代都市長岡の中心地となりました。

その変貌ぶりは、城下町だと思っておとずれる人もビックリするほどです。

戊辰戦争(一八六八)で長岡城は焼け落ちました。

それから城跡を開墾し、諸産業を興し

本丸に鉄道の停車場をひき入れたのです。

長岡城の面影を心に刻んで

新しいまちづくりをした人びと。

それは、江戸時代の牧野氏治政時代に培った

士民協働の精神が基になったものでした。

自分を越えて互いの人間性を尊重しよう

知恵が士魂商才のまちづくりとなったといえましょう。

第二号はいまも長岡の人びとの心に残る

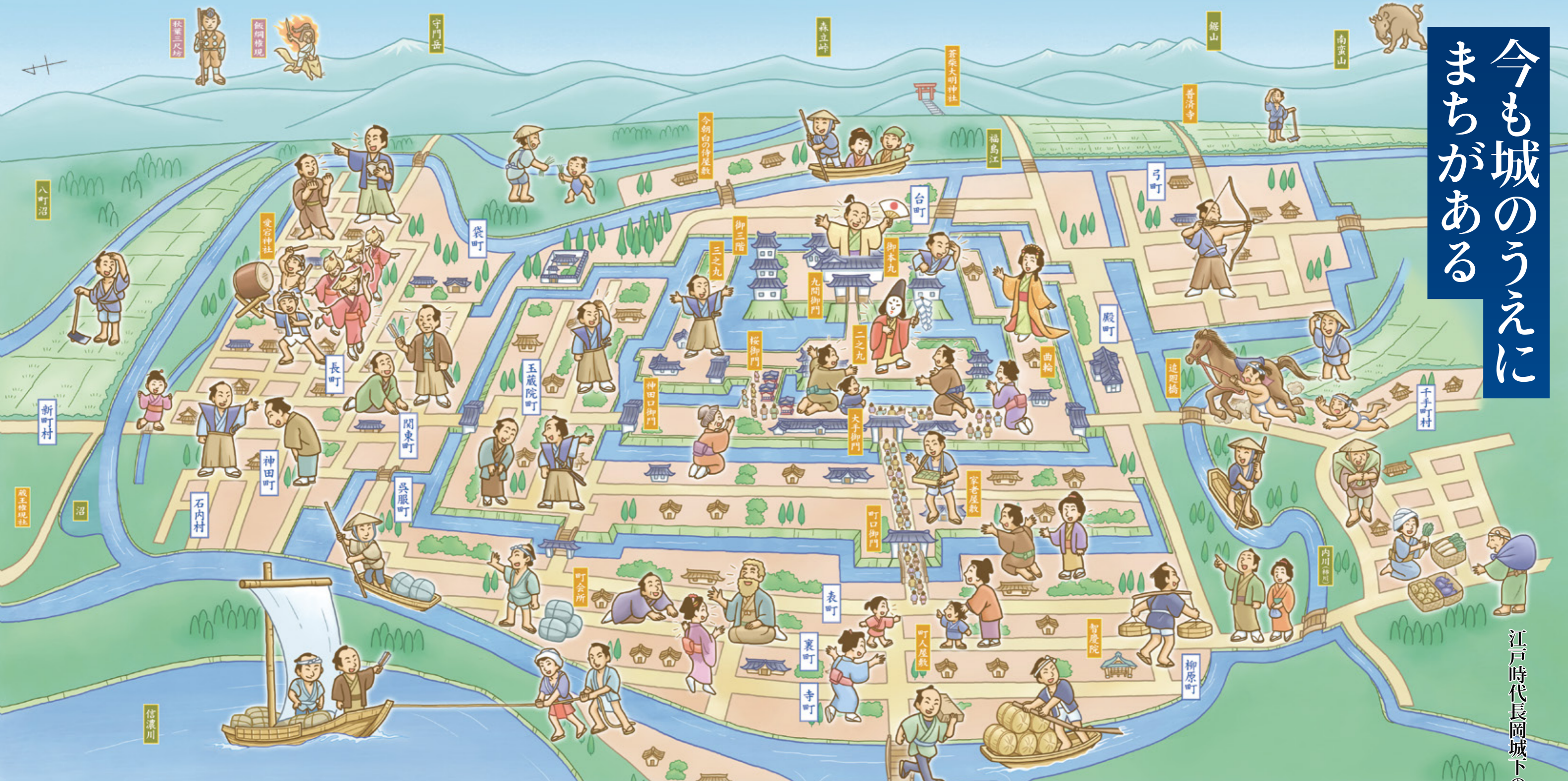
まぼろしの長岡城をめぐる話題です。

城はなくとも夢がある。

長岡開府四百年記念事業実行委員会 会長 森 民夫

今も城のうえに まちがある

江戸時代長岡城下の図(イメージ図)



長岡駅 上越新幹線・信越本線 大手通り アオーレ長岡
大手通り交差点
長岡藩主牧野家史料館にある城内復元模型に、現在の施設を重ねたもの。

長岡城は一部を除いて石垣がありませんでしたがこの新しいまちの城には人づくりの志が積みまれています。米百俵の精神です。二之丸跡には、開かれた市民協働の城アオーレ長岡が建ちました。そんな長岡の夢づくりの城の物語をご紹介します。

(注) 米百俵の精神
幕末、長岡藩は奥羽越前藩同盟軍に属して、明治新政府軍と戦い、そのための城と城下、領内の村々は焼亡しました。戦後、復興に苦しみ、とりわけ城下に飢饉が襲いました。そのとき支藩の三根山藩から米百俵が送られてきました。藩儒小林虎三郎が、藩士、家族にわけず、未来を担う子どもたちのために教育資金にしました。この故事を基に、人材育成に重きをおく精神性を、長岡では「米百俵の精神」と呼んでいます。

長岡城
それはそれは、立派な御城でございました。天守ともいうべき御三階櫓の両はしには鯨鯨がかがやき
領内のすべてが見渡せるかのようには、八方正面櫓の役割りを果たした櫓が城の中心にでんと据わっていました。殿様の牧野様はときどき登っては領民の声に耳を澄ませておいででした。そこは今、JRの長岡駅です。さて、長岡藩風は「常在戦場」。戦国時代に興った、その思想は泰平の世になると創意工夫をしようとする侍や商人、農民たちの知恵となりました。身分の垣根を越えた士民協働の心の芽生えです。産業・文化が興りそれは楽しいまちづくりとなっていきます。水路が縦横にめぐり船が行きかい城と町は浮島のように賑やかなものとなってゆきます。ところが、戦争と時代の波によりにわかには城はなくなります。人びとは失われた御城のうえに新しいまちを創造しようとしてます。それは、時代を先取りした市民協働の士を盛りあげた士魂商才の新しい城でした。

長岡城は天下の名城

まぼろしの天下の名城

最近、長岡の画家水島爾保布の遺族宅から、長岡城之図の下絵が発見された。爾保布は昔の長岡の復元に情熱を注いだ日本画家だったが、そのなかでも長岡城の鳥瞰図は、畢生の作品である。その長岡城之図は昭和二十九年（一九五四）に描かれたとされているが、どのように長岡城の概観を復元したかは謎であった。

そもそも不思議な鳥瞰図は江戸時代からあった。堀直奇が長岡築城をした際、鳥のようになって長岡城を眺めた図が始まりだったが、絵師の誰もが、その図に挑戦し、長岡城之図を描いている。ところが、水島爾保布は誰も描いたことのない、細部にわたる幻の長岡城之図の作成に挑戦した。

芋引形兜城と白狐

築城伝説に一匹の白狐がでてくる。この白狐を若き美貌の女性だという郷土史家もいる。

築城には縄張り（設計）が大切だ。春雪のころ、一匹の白狐があらわれた。その白狐は一本の長い芋（衣装に加工できる草の一種）をくわえていた。白狐は雪

のうえをピンピン飛びまわりながら跳ねまわり、やがて巨大な城郭の基本図を描いたというのである。

長岡城は平城である。一番高いところに本丸を置き、地形が低くなるにしたがつて二之丸、三之丸、詰之丸、曲輪などを設けた。それが、兜の鍔の形に似ているところから「芋引形兜城」と称したとある。

八文字構浮島城

長岡城はもうひとつ別名を持つ。大河信濃川の大きな中州（河のなかの島）に城をつくったので浮島城という。八文字構えとは、城門のなかでも大手口門と神田口門の二つが兜の鍔の形のように八文字形に似ているところから命名されたもの。

堀は、信濃川などの伏流水を利用し、また城下は周辺の河川が囲むように流れていて、まるで水に囲まれた城と城下であったことから八文字構浮島城と呼ばれた。その浮島城に待とその家族約八千人、商人と職人約八千人計二万六千人が住んでいた。

人柱を入れない城づくり

城づくりには、鎮護のために人柱を入れることを通例としていた。ところが長岡城は領民の難儀を考え、と同時に仏神の守護を念じて、樹木で人形をつくらせて、本丸の四隅に埋めている。

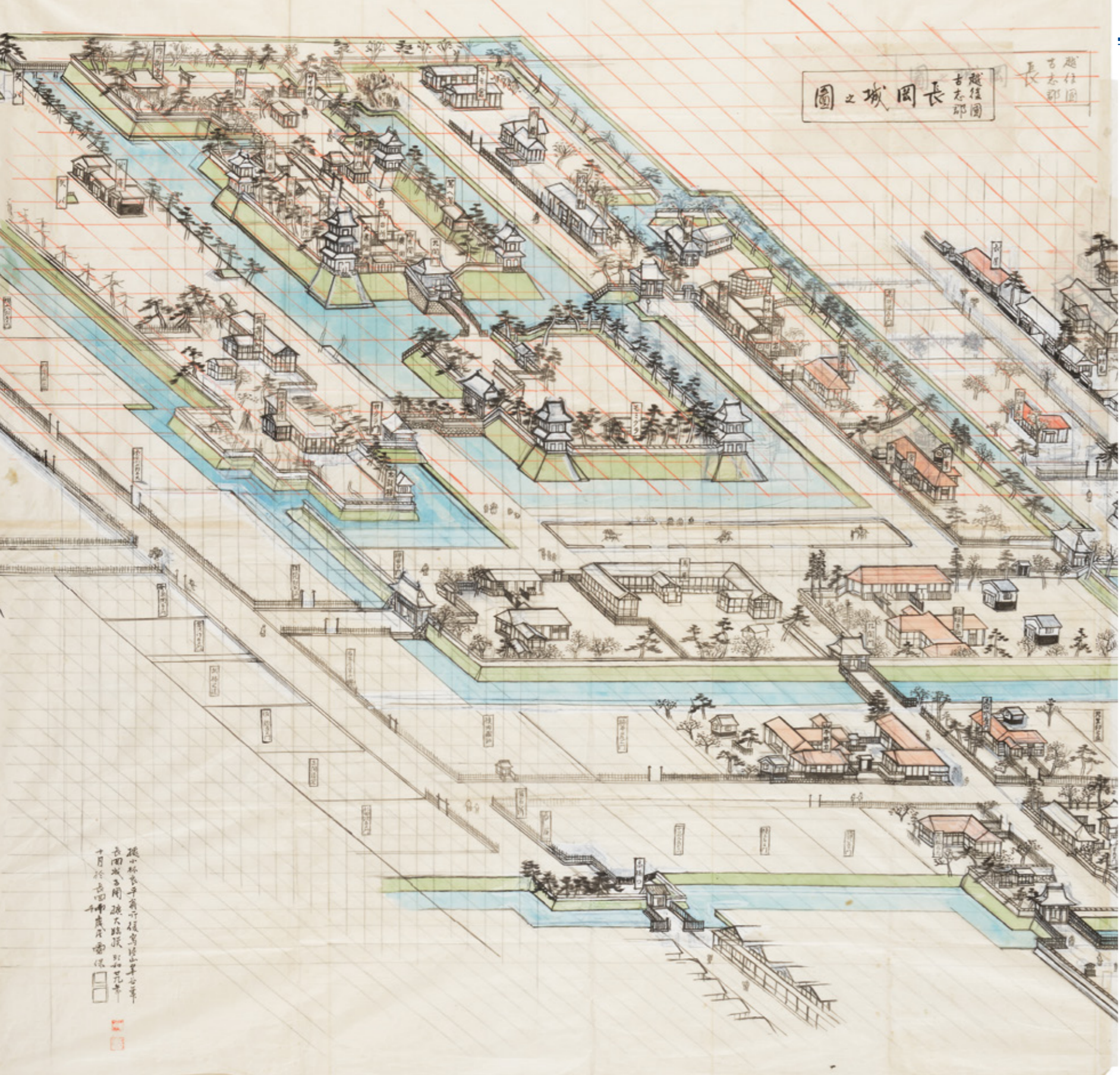
九つの櫓をもった城

本丸には、御三階櫓のほか、北に面して二棟、南に三棟の二階櫓があった。二之丸では西の両隅に、三之丸では東北の隅に、それぞれ二階櫓が配置され、美しい白塗の格子窓が開いていた。城内には松樹が植えられていて、澄んだ堀の水に映えていたという。

十七の城門があった

本丸から西へむかって九間門（これを本丸の正門ともいった）、九間門の堀のはしの付属の冠木門。二之丸を南にみて二之門。三之丸の西方に桜門があり、中央の大手門を西へ町口門、北寄りに高橋口門などがあった。

（今泉省三著『長岡の歴史』第一巻参照）



長岡城之図 越後 古志郡 長岡

水島爾保布筆「長岡城之図」(下絵)

この下絵から、水島爾保布は資料を考証し、できるだけ正確に描こうとしたことがうかがえる。城内の松樹は長岡藩が戦いに備え植樹したものだ。東京生まれで東京美術学校（現東京芸術大学）出身の爾保布は新聞記者となり、やがて人気挿絵画家となった。雪国の人情と美しい松樹に魅かれた爾保布は長岡に移り住んで長岡の歴史・文化を紹介した。

名城の条件

城郭内のユートピア

長岡城址は、現在の長岡市中心街がすっぽりと入る広さだ。その規模は三万七千坪余り、いや三万九千坪（いずれも『三島億二郎日記』から）とするものもある。

本丸、二之丸、三之丸、詰之丸、曲輪がほぼ梯郭につらなり、水を満々とたたえた堀に、白壁の九つの櫓や堀、そして松並木と十七の城門が威風堂々と鎮座していた。石垣は本丸の一部と堀の水際に少しあったが、よく手入れをされた土塁に囲まれていた。城郭のなかには侍屋敷があり、信濃川、福島江、内川（柿川）、栖吉川などの河舟の往来ができる川を外堀だとすると、町人町や足軽屋敷などを含めた総構えの城郭都市だった。

そこに侍と家族約八千人、商人と職人約八千人が住んだ。外堀の周りには約十万人の農民たちが暮らしていた。



11月 二之御門外御引橋
九間御門辺一覧の図より（『長岡城之面影』）

身分の垣根の低さ

爾保布の描く長岡城之図には特徴がある（P7参照）。きちんとした幾何学的な美しさもあるが、絵のなかに人が描かれていることである。本丸のなかを歩く侍はもちろん、馬場で乗馬訓練をしている若武者、果ては城内を見学しているのか、庶民たちが侍に挨拶している姿まで映し出されている。曲輪では、夫婦者が仲睦まじく歩く様子も描かれている。

その昔、城は戦いから守るためとして築かれたものだが、長岡城は本丸、二之丸を除くと平素から庶民が入っている。旧暦六月十五日（八月二日ころ）の蔵王大祭では、町の屋台が十八台も町口門から大手門を抜けて馬場（厩前）に勢揃いした。そのとき、十万人の領民のうち二万人も城内に入り、侍と一緒に祭りを楽しんだという。

冬の十一月、領内各組の庄屋、村役人は、年貢納人の大事業が終わると、御城内の本丸や二之丸に入るのを許されて、伝統の「御能」を、お殿様の牧野氏や家臣、女性とともに観賞できた。

江戸時代、平和を享受する庶民にとって、長岡城は名城だった。それにしても松樹の美しさは長岡城と城下の特徴だ。



6月 御厩前にて屋台を見る（『長岡城之面影』）
大勢の領民が城内に入り、日頃、侍が乗馬の鍛錬をしている馬場にまで入り込んでいる。

長岡城の築城

長岡城は慶長十年（一六〇五）ころから、戦国武将であった堀直奇によって工事が始まったとする説が有力である。堀は豊臣秀吉の小姓をしており、大坂築城にも関わっている。大坂城は総構えで諸

産業の育成を兼ね備えた城郭であった。豊臣秀吉の朝鮮出兵に呼応した堀直奇が、新潟湊と信濃川で直結した長岡城を造りはじめた。ところが豊臣政権が滅びると、堀直奇は徳川家康のもとに入り、大坂冬の陣、夏の陣で活躍している。そのまま長岡藩八万石を領知するのかわり、思った元和四年（一六一八）に三河牛久保（愛知県豊川市）出身の牧野忠成が入封する。その牧野は、徳川家康、秀忠のもとで江戸城構築の様子をつぶさにみてきた。家康が江戸築城の本陣とした江戸愛宕山の愛宕下に屋敷を拝領したのも牧野忠成の幸運だった。忠成は堀直奇の築城工事を引き継ぐとともに、戦いの城ではない、平和な城に変えようとする。

城下の機能はそのままに、長岡城のシンボルを本丸に、二之丸は兵糧など、藩政の役所は三之丸に置き、石垣よりも土塁で長岡城を完成させた。まさに、戦国武将の堀直奇と牧野忠成は、大坂城と江戸城を折衷した、侍と民の共存のための城を造りあげた。

落城した城を奪いかえす 長岡落城悲話

慶応四年（一八六八）五月からの攻防戦で長岡城は焼け落ちる。長岡城は、五月十九日の長州藩奇兵隊らの信濃川渡河の奇襲で第一回の落城。七月二十五日、長岡藩兵六百余が奪還。同月二十九日、再び落城。落城に際し、城下の侍、家族は、燃える城をふりかえり涙を流して再起を期した。

北越戊辰戦争

幕末、長岡藩に河井継之助という英傑がでた。たった百二十石の家柄の侍だったが、よく藩をまとめて、莫大な借金を返しあげ、なおかつ、余剰金を積み上げた。その手腕は地方ではすぎた男だった。豪毅だという人もいる。その男が、新政府が発足すると、その新しい政権をノータンとした。その言い分は、義理を重んじない新政権は、いずれ世界から孤立するといふのである。その義は、たとえ小藩でも天下に知らしめることが、日本のためになると主張した。

その結果、怒涛のように押し寄せる明治新政府軍に立ち向かい敗れた。長岡藩と城下、領内外の村々は焼亡し、多くの犠牲者がでた。

長岡城攻防戦は慶応四年（一八六八）五月から七月まで。そのため長岡城は二つの櫓と二つの城門を除いて、地上から消えた。

しかし、城の形は残っていた。堀や土塁、石垣の一部、そして伝統の常在戦場の精神である。（注：常在戦場の精神は前号で記述）

長岡城の落城

長岡城は長州藩奇兵隊らの信濃川渡河の奇襲戦をうけ、あえなく落城。その際、長岡藩兵の多くは長岡城を枕に討ち死にを決意した。

しかし、藩法は無駄死にを許さなかった。捲土重来を期して、越後加茂まで撤退し、奥羽越（東北）の諸藩と協同して、長岡城の奪還をめざす。

そして、多くの女性、子どもたちも城下を脱出した。彼女らは、長岡藩とともにその運命を甘受しようという覚悟があった。それは、どんな戦場においても生き抜いて長岡城下に帰還するという希望である。そのけなげな態度に後押しされた長岡

藩の男たちは、三ヶ月後の七月二十五日、長岡城を奪還した。

長岡城奪還の快挙

それはのちに「長岡城の歌」として市民に愛唱される「ころしも文月（七月）宵闇の八町沖を押しわたり」で長岡城を奪いかえす。河井継之助らの長岡藩兵は、大手口門から長岡城に入り、感激で落涙したという。城下に残っていた領民は、「長岡様のお帰りだ」とばかりに酒を振る舞い、盆踊りをした。がしかし、総督の河井継之助が負傷すると、再び落城。長岡藩兵とその家族は八十里越えをし、会津、仙台、石巻、一関などの東北へ脱出した。そこでも二度目の長岡城奪還をめざそうとした。

総督が没し、弾薬、食糧も尽きると、新政府軍に降伏し、明治元年（一八六八）十一月の降雪のなか、長岡城下に多くの藩兵と女性・子どもたちが帰ってきた。



加賀藩絵師が描いた「長岡城攻防絵図」(部分)
戦いで燃える長岡城、城下、領内の村々が描かれている。この戦いで長岡城などを失っただけでなく藩兵 340 名、領内の人々約 100 名以上の人的被害も大きかった。

廃墟に新しい城

まちと人づくり

夢を追う

焼け跡に雪が降る。食糧もない。スペイン風邪が蔓延する。明治新政府からの救済はない。明治元年（九月八日改元・二八六八）十二月二十五日、長岡藩は、今までの七万四千石余の領地を没収され、新たに二万四千石を与えられたが、領地の多くは戦場であったから、その年の収穫はなかった。あつたとしても、もう明治新政府が収納していた。そこから、三島徳二郎をはじめとする侍たちは、長岡城址の開墾に立ち向う。

長岡城址を開墾

長岡の侍たちにとつて、長岡城は大切な寄りどころであったはずだ。たとえ焼け跡であっても昔日の誇りがそこにはあつた。

その城址の開墾を決定したのは侍たちだった。当時の長岡藩の指導者である三島徳二郎は、窮乏にあえぐ士族とその家族を救う道は城址の開墾であると決定し、土塁を取り崩し堀を埋める工事を行った。

開墾地には桑苗が植えられ、堀は埋められて田畑に変わっていった。同時に城下町の道端にも桑苗が植えられた。養蚕を興して自活しようとした。

世にいう廃藩置県が決定する前に、長岡の侍たちは働いて家族を養うことを選択したのである。ところが長岡藩は柏崎県に吸収され、全国の城地が大蔵省に引き継がれると、残りの城地の開墾のねがいを政府に提出している。明治六年

（一八七三）二月、全国の城郭は、陸軍省に管轄されることになった。そのとき長岡では、三島らの士族が中心になって移管に反対し、城地は旧長岡藩主牧野氏の所有地であるとして陸軍省に引き継がなかった。

そのため、城址には柏崎県出張所や国漢学校、長岡会社病院（のちの長岡赤十字病院）や小学校がつきつきと建てられ、復興の核となっていた。

士族の屋敷地は商人たちに分割移譲されて、新しいまちが旧城内に築かれていった。

長岡城址に公園を

明治十三年ころ、長岡城址はまだ本丸の御三階櫓跡の高台や堀の一部が残っていた。その城址を人びとは懐かしんで翌十四年に公園にしようという運動が起こった。四季の草木を植え、堀に魚を放つて一大公園にしようというのである。



二之丸跡にたつ宝田石油会社の本社
明治35年頃。東山油田開発で急成長した宝田石油会社（のちの日本石油会社）の本社社屋が二之丸跡に建てられた。

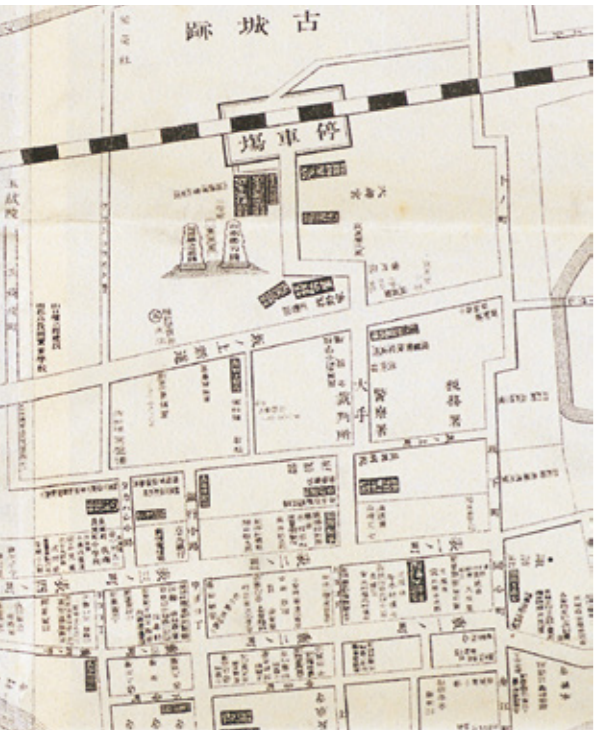


絵師・片山翠谷（二代）が描いた長岡城址の図（明治中期）。
片山翠谷は二代にわたって長岡藩の町同心をつとめ、城下町や農村の風景を絵に残した。かつての二之丸から本丸付近に雪月花亭（茶屋）や撃石館（集会場）が設けられ、土塁には山本帯刀碑・河井継之助碑がみえる。市民の憩いの場として整備された城址の面影を伝えている。

今は人づくりの城 城あとのなかに学校をつくる

長岡城址には国漢学校、阪之上小学校、長岡洋学校（のちの県立長岡高等学校）、実業学校（実業家山口権三郎がつくった学校）、商業学校（のちの県立長岡商業高等学校）などの学校がつくられた。これは長岡城址を人づくりの城となぞらえたものである。

その一方で、経済復興を大切にし、産物会所（のちの長岡商工会議所）などの産業の振興をはかる施設が設置されている。



長岡案内図（明治31年）
北越鉄道（現 JR 信越線）開業時の長岡停車場付近の案内図。現在のようなくさく大手通はまだできていなかった。

長岡城の記憶 （明治）戦前

戊辰戦争後の長岡は、城下町から近代的商工業都市に生まれ変わり、長岡城址はその中心となった。

明治二十一年（一八八八）に設立された北越石油株式会社は、東山油田の開墾に成功し、以後数年の間に二百を超える石油会社が誕生する。長岡には製油所が立ち並び、オイルシティとして全国に名を馳せることになる。

また、新潟県内の鉄道敷設について忍耐強い陳情活動が功を奏し、明治二十九年（一八九六）に鉄道敷設の免許が下りる。その後、長岡停車場の位置をめぐる、旧城跡派と中島派の二派に分かれて誘致合戦が繰り広げられたが、城跡公園内が建設地に決定した。



明治31年開業の長岡停車場
北越鉄道が旧城内の本丸跡に長岡駅をつくった。

停車場の建設が決まると城跡公園の一角は一気に整地され、駅前の発展を見込んだ商店などが建ち並び新たな中心街を形成していった。

東山油田とその掘削から生まれた鉄工業の成長に国内の大戦景気による消費拡大が加わり、長岡駅の乗降客・貨物は年を追うごとに増加した。

戊辰戦争で灰燼に帰した長岡は、士族と町人を中心とした商工業に牽引され活況を取り戻した。

大正十年（一九二一）、宝田石油は日本石油と合併し東京に移転する際に、二之丸跡の本社土地、建物に寄付金を添えて長岡市に寄贈した。その後、旅館王といわれた篤志家の寄付金を得て、大正十五年（一九二六）その土地に長岡市公会堂が完成した。

江戸時代、越後長岡藩の士民協働の場であった長岡城址・二之丸跡は、復興を遂げた後、商工人の手から長岡藩の精神と長岡再興の願いを添えて長岡市民に贈られたのであつた。



長岡城址本丸跡の一角、御三階櫓のあった高台の上に建てられた山本帯刀碑（左）と河井継之助碑（右）。両碑は大正7年2月、悠久山公園内の現在地に移された。写真は明治30年代。株式会社大坂屋書店蔵。

長岡市民になったお殿様

牧野家第十七代当主牧野忠昌氏寄稿

牧野家の歴史

「牧野家家史」によると、源平時代牧野家の祖二十代田口重能（成能）は平氏に属し、阿波（徳島県）一帯を治めていた。寿永年間（一一八一～一二八四）源氏に討たれた平宗盛一族が、安徳天皇を奉じて難を四国に避けた時に、重能、教能親子は屋島に行宮を造営して鳳輦を迎えた。その後も勤めを怠らなかつたので従四位を賜り、民部大輔を任じられ、十六葉の菊、五三の桐の紋を子孫に伝えて家紋とすべきとの沙汰を拝受した、と記されている。また、「徳島県立博物館友の会会報」には以下の記述がある。

民部大輔重能は平清盛に福原の外港大輪田泊の修築奉行に任命された。また、阿波に壮麗な御堂を作りつつあり、阿波にも平泉に勝るとも劣らない仏教文化が花咲こうとしていたが、予期しない義経軍の阿波上陸によって夢と消えた。建築中の御堂の丈六仏九体は、その後奈良に運ばれ東大寺再建に使われたのであった。江戸初期に描かれた「東大寺中寺外惣絵図」には浄土堂のそばに「阿波民部重能」と記された石塔が描かれている。この石塔は現存していない。

現代に生きる牧野ファミリー

昨年四月、神奈川県逗子市から、父祖の地長岡へ転居した。住宅は遙かに弥彦山を拝し、眼下にご城下を望む高台である。転居した折には、地域の方々や、公民館で歓迎会をしてくださった。思いもよらぬことで、こちらの方々はお心が温かいのだなあと感謝した。今後も町内会の行事には積極的に出席するように努め、公園や神社の清掃、お祭りにも参加し、地域の方々と交流したいと思っている。昨年、長岡花火は東京の親戚を案内して信濃川河畔で見たが、三日は近所の公園からのんびり見物した。初夏にはホタル狩りにも出かけてみたいと思っている。



平成 28 年お正月、鉢伏神社へ息子忠慈と初詣

長岡開府四百年へ向けて

平成三十年（二〇一八）が四百年にあたります

実行委員会始動

平成二十八年六月二十八日、市と商工会議所の呼びかけで「長岡開府四百年記念事業実行委員会」が発足しました。アオーレ長岡で開催された設立会議では、顧問に牧野家第十七代当主牧野忠昌氏、会長に森民夫長岡市長、二人の副会長に丸山智長岡商工会議所会頭、関正史長岡市議会議長の就任が決定。このほか各界の代表者など総勢二十二人の委員で会を構成します。実行委員会内に事業の具体案を検討する部会が設置されます。

百年前の大正六年（一九一七）、「長岡開府三百年祭」が開催され、長岡市を中心に旧藩領の古志郡各町村こぞって盛大に祝いました。記念式典のほか、物産共進会、武術大会、当時珍しい飛行大会なども開催され、市中は仁和賀や山車で大いに賑わいました。また、市民篤志家による悠久山公園の整

水島爾保布筆 大手通りの長岡復興祭の仁和賀。昭和 30 年代。



備が進むなど、三百年祭を契機に官民一体で多くの取り組みがなされました。藩政時代から連続と続く市民協働のルーツのひとつであり、長岡の経済・産業の発展に大きく寄与しました。そして今、長岡開府四百年を契機に、合併で広くなった地域の歴史・文化・伝統を見つめ、郷土への愛着と誇り、そして一体感を高めること。また、ふるさと長岡の魅力を広く国内外へ発信し、交流を拡大することが期待されています。実行委員会では、市民協働・官民連携で記念事業を展開し、次代を担う子どもたちにつきの百年のバトンを手渡す取り組みを進めていきます。



長岡開府 400 年記念事業実行委員会

長岡の歴史ミステリー

歴史探偵

「郷土史料館」をゆく

昭和の築城

「お山」の愛称で親しまれている悠久山公園の一角に郷土史料館がある。昭和四十一年（一九六六）の長岡市制六十周年記念事業と連動し、昭和四十三年（一九六八）四月二十日に開館。まもなく五十周年を迎える。この建物、外観は確かにお城だが「長岡城」とはかたちも場所も実は別ものである。

昭和三十年（一九五五）から始まる日本のいわゆる高度経済成長期、日本各地に「天守閣」が出現した。史実を重視して再現された「復興天守」。象徴性をより重視した「模擬天守」。「所得倍増」や「一億総中流社会」の掛け声のもと、日本人がそれぞれに「私の城下町」を求めた活気あふれる時代であった。

石碑の謎

そもそも明治・大正期には長岡城址（現在の長岡駅前）にあった「故長岡藩総督河井君碑」や「旧長岡藩宰山本義路君碑」が悠久山に移されたのはなぜか。

石垣の謎

昭和二十九年（一九五四）八月二十日、長岡駅地下道掘削工事のさなか、地下四メートルの地点から長岡城の累石が発見された。郷土史料館の入口左側の石垣に、この累石が組み込まれている。長岡城は総じて

破風の謎

鋸山など、東山連峰の山並みを背景に威容を誇った長岡城。シンボルの御三階櫓の出窓には、優美な曲線の「唐破風」があった。一方、西側眼下に広がる長岡の町並みを意識した郷土史料館。こちらは一階東側に「千鳥破風」がある。これは長岡城の本丸御三階櫓にはなかつたものだ。

歴史探偵の眼

かつての長岡城を意識しつつ、市制六十周年にふさわしい、長岡の新たなシンボルとして、郷土史料館は誕生した。随所に刻まれた謎が指し示す、昭和という時代の潮流やかつての市民の長岡城へのあこがれを訪ねてほしい。現在、郷土史料館の目玉は「人物顕彰展示」だ。城下町長岡の歴史とともに歩んだ先人たち、その情熱が昭和の築城にあらわれている。

屋根瓦の謎

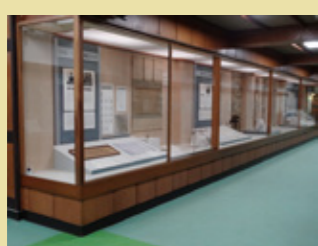
長岡城の三つ柏の瓦も見つかっているが、数回にわたる発掘調査でも確認できないでいる長岡城の屋根瓦。郷土史料館の屋根は、牧野家の家紋「丸に三つ柏」を刻した軒丸瓦で、荘厳に飾られている。



郷土史料館の入り口左側の石垣に組み込まれている旧長岡城の累石

天守閣の謎

郷土史料館の「天守閣」はなぜ三階建てなのか。長岡城のシンボル「御三階櫓」のおもかげと郷土史料館の外観を重ねて見る市民も多い。また、開館当初の展示の様子を知る市民からは、復元された会津若松城天守閣の外観を思いうかべて、その類似を指摘する声が多く聞かれる。



長岡市郷土史料館
開館時間／AM9:00～PM5:00
休館日／毎週月曜日
(祝日等の場合は翌日)
所在地／長岡市御山町 80-24
電話／0258-35-0185



悠久山公園の高台にそびえる郷土史料館
最上階の展望台からは、市街地や新潟平野が一望できる。

開府四百年のあゆみ

No.2

いまから八十五年前、日本海と太平洋を結ぶ夢の博覧会が開催された

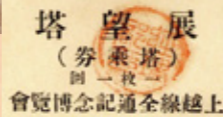
上越線全通記念博覧会

昭和六年（一九三二）九月一日、上越線は宮内駅から高崎駅までの全線が開通した。記念博覧会は、八月二十一日から九月三十日まで、水道タンク付近を第一会場に、寺泊水族館を第二会場に開催された。全通により長岡市は、首都東京とつながり、さらに新潟市からロシアのウラジオストクを見据えた世界的な位置を占めるという市

民の思いが、博覧会の開催を後押しした。二十余りの展示館が出現し、全国の産物と最新の技術を紹介。四十一日間の入場者数は約六十七万人、博覧会予算の半分は市民からの寄付金であった。開催後、市役所は、六九六ページに及ぶ記念誌を刊行。市民協働の記憶は、記録として後世に伝えられた。



展望塔 絵葉書
水道タンクに付設したエレベーターが上下する展望塔。眼下に信濃川、東山には石油槽の立ち並ぶ様子が望め、毎日700人が搭乗した。



展望塔搭乗券



マジックアイランド 絵葉書
当時としては画期的な魔法の国、マジックアイランドはエジプト調で、会場内で最も入場者を喜ばせた。

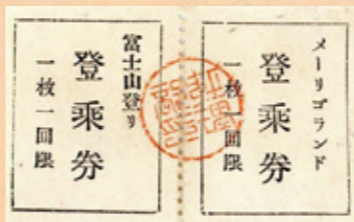


マジックアイランド入場券



上越線全通記念博覧会鳥瞰図

博覧会は現在の水道公園付近で開催された。鳥瞰図の右側端に見えるのが、コドモノクニのスペース。「メリーゴーランド」と「富士山登り」のアトラクションが際立っている。



メリーゴーランド・富士山登り搭乗券
この搭乗券はいまでも、中央図書館に資料として残っている。



寺泊第二会場ポスター



博覧会正門 絵葉書

千也がゆく

かずや

KAZUYA REPORTS

長岡藩

ゆかりの地を

巡る探訪記

第2回

牛久保編



今に残る牛久保城主牧野家と領民の固い絆：

うなごうじ祭のルーツは戦国乱世に遡る。牛久保城主は領民を大事にし、日頃の苦勞をねぎらい、城中に招き、酒食を振る舞った。領民たちは酒に酔い痴れ、気づいた時には立つこともままならず、ゴロゴロと転がりながら互いを起こし合って城をあどにした。その有様をリアルに再現する神事が、城主の領民への想いと、領民の城主への感謝を今に伝える奇祭である。



牧野氏が深く尊崇していた熊野神社。牧野忠精公が神社に寄進した石灯笼とお手植えと伝えられる柏の古木がある。



牛久保小学校の卒業生が作成した参州牛久保の壁書。今川、武田そして織田、松平(後の徳川)の狭間を必死で生きぬいた三河武士が心の支えにしたのが家訓「参州牛久保の壁書」である。冒頭の「常在戦場」は、長岡藩士としての精神規範として今でも受け継がれている。



笹踊り(ささおどり)。大陸風の衣装に笠を被り太鼓を胸に付け、ヤンヨー神と呼ばれる獅子方の唄にあわせ、3人の織りなす踊りは狂喜。



長谷寺(ちょうこくじ)にある武田信玄の軍師山本勘助の墓。勘助の守護神であったとされる木造摩利支天尊像が安置されており、勘助の遺髪を埋めている。

今回は長岡藩主牧野家の里『牛久保』に行ってみました。早速街に着くと彼方此方で爆竹の音が鳴り響いていて、天王社では男の子の神児舞、牧野成定公廟の前では笹踊りとヤンヨー神が唄にあわせ町中大賑わい！フィナーレは八幡社前でお祭りが終わるのを惜しむヤンヨー神が、何度も寝転がり、なかなか鳥居をくぐって

くれない。また隠れ太鼓は、決して人形ではないアクロバットな演技は必見です！私が小学時代に同級生と作成した『私たちの悠久山(阪之上小学校/編)』と言う本を牛久保小学校で発見しました！牛久保小学校にも本が残っているとは小学生の時は思ってもいなかった事で感激しました。

石丸 千也(いしまる かずや)

長岡で美容室を経営し、自らもスタイリストとして活躍中。長岡の歴史を通して郷土を考え、次世代に伝えたい、と熱き想いを持った若者が集う「越後 RYO-MA 倶楽部」の局長。「米百俵まつり」で坂本龍馬に扮している。



愛知県豊川市牛久保町で例年4月初め、世にも珍しい奇祭として全国から見物客が押し寄せる『うなごうじ祭』が開催される。「うなごうじ祭」は「若葉祭」の俗称、「うなごうじ」とは「尾長蛆」の変化した語。「ヤンヨー神」が一斉に寝転び転がる様は「うじ虫」のようだというので「うなごうじ祭」とも呼ばれるようになったといわれるが、定かではない。寝転んだ後は勝手に起き上がってはいけない。

塩鯨の本体を薄切りにして熱湯で塩分や脂分を除き、夏野菜（夕顔・ナス・ジャガイモ・かぼちゃ等）と共に煮て味噌・醤油・塩などで調味する。東北を中心に全国に存在し、それぞれに味付けも具材も食べる時期も異なる。写真は長岡市内の割烹茂のくじら汁。



あつちえ夏こそ 熱々のくじら汁

豪雪の地なれども長岡の夏は手強い。山囲む盆地ゆえに、冬寒く、夏は蒸し暑い。

かくの如き地の、真夏の定番料理がくじら汁である。塩鯨の脂身と長岡伝統野菜・夕顔が入った熱々の汁。汗を

噴き出しながら、碗をすするのが長岡流だ。

新潟県民のソウルフード・

くじら汁には夏バテ防止と疲労回復効果があるという。

年中暑いインドや東南アジアで、辛い料理を食すのは、一時的に体温を上昇させ、発汗

作用を促し、結果的に体温を下げるという理にかなった食習慣である。

長岡でくじら汁が食された起源は不明だが、佐渡や寺泊など県内各地には鯨塚が残る。また、幕末の桑名藩士の出張日誌ともいふべき『柏崎日記』にもくじら汁の献立が記されている。

日本史に鯨料理が登場するのは室町時代。仏教の影響で、獣食が禁じられていた当時は、魚とみなされた鯨は貴重なタンパク源であった。

江戸時代には、水軍から派生した捕鯨のブ口集団が各地に出現し、庶民にも広く食されていたことがうかがえる。

長岡花火の起源

〜つぎの百年へ連なるテーマ〜

今日の長岡花火は、「世界一の花火」とまでいわれるようになった。それは大河信濃川を舞台としたスケールのみならず、災害復興、平和祈願などの人類の普遍的テーマを持つゆえだろうか。

古くは、九代藩主牧野忠精

が花火を打ち上げたといわれる。

忠精は特に、藩の教育・文化を盛り立てた人だが、その時代にまで長岡花火のルーツを探るのも面白い。文政四年（一八二二）には、藩の砲術師範が『夜の相図（戦時の狼煙）』として、銀河星・飛蝶火などの名称で打ち上げている。天保十一年（一八四〇）、幕府の命令による『三方領知替え』の騒動が起こるが、幸いにして藩主の配置替えは回避された。すると、藩士領民一体の喜びを花火であらわしたという。

近代に入り明治十二年（一八七九）には、遊廓の打上げ



長岡の夜空いっぱい打ち上がる復興祈願花火「フェニックス」

花火が始まる。それは市民の煙火協会に引きつがれたが、先の大戦のさなかに中断を余儀無くされる。終戦から二年後の昭和二十二年（一九四七）には、長岡空襲からの『長岡復興祭』のなかで復興・慰霊の花火として復活した。今や花火は長岡人の精神性を表現するものとなっている。

長岡の花火は、時代ごとにそれぞれのテーマを持って来た。牧野家の入府から四百年を迎える今、市民の誇る花火は、さらなる百年に何を伝え残すものとなるだろうか。

ROOTS
400 越後長岡

長岡開府400年という節目の年を契機に我々の住む地域の歴史や文化のルーツを見つめ直そう
平成30年は長岡開府400年

越後長岡 ROOTS400 第2号 長岡城 ～城はなくとも夢がある～

次号予告/山本五十六と斎藤博

発行/長岡開府400年記念事業実行委員会 平成28年8月1日
編集/越後長岡ROOTS400編集会議 代表 稲川明雄
石丸千也、恩田富太、渡辺千雅、長岡商工会議所、長岡市
〒940-8501 新潟県長岡市大手通1-4-10（開府400年記念事業準備室内）
Tel.0258-39-2395 Fax.0258-39-2272
E-mail: kaifu400@city.nagaoka.lg.jp

制作/株式会社ネオス
協力/蒼柴神社、(株)越乃雪本舗大和屋、北越紀州製紙(株)、牧野成定公奉賛会、長谷寺、熊野神社、豊川市立牛久保小学校、長岡市立科学博物館、長岡藩主牧野家史料館、長岡市立中央図書館、長岡市立中央図書館文書資料室